

ことばと交

方言分布が見せる「坂」「崖」「峰」

大西拓一郎
Onishi Takuchiro

ことばは、人々が「交（まじ）わる」ための必要不可欠な道具であり、新たな交流が生まれる場所では、ことばそのものも変化していく。ことばから「ルネッセ」を導くシリーズ第2弾では、方言地理学の見地から、「坂」「崖」「峰」で表されることばの伝播の経緯と、コミュニティと言語のあり方をひもとき、ことばと人のつながりを考える。

おおにし・たくいちろう
1963年生まれ。方言学者。現在、国立国語研究所教授。おもな著書に、『ことばの地理学』（大修館書店）、『現代方言の世界』『新日本語地図』『空間と時間の中の方言』（いずれも朝倉書店）など。

■二都物語

「方言圏論」というのをどこかで耳にしたことはないだろうか。都のことばが周辺に広がっていくことにより方言ができあがるという理論である。都からの新しいことばの放射は、何度も繰り返される。そのために方言の分布は同心円を描く、とされる。

都からの重層的な新語の放射と伝播は、都との言語の類似性を定量的に捉える場合、都からの距離との間の相関を示唆する。すなわち、都に近いほど類似性は高まり、遠いほど類似性は下がると想像される。

このことを具体的に検証してみよう。幸い、日本では『日本語地図』『方言文法全国地図』『新日本語地図』という全国レベルの方言地図集が刊行され、データも公開されている。地図上のそ

れぞれの地点の語形全体の中で都と同じ語形が占める割合（%）を一致度とし、類似性の指標としよう。たとえば、『日本語地図』においてA県B市の語形が合計100あったとして、そのうち35が都と同じ語形であるなら、A県B市の都との一致度は35（%）となる。地図上の全ての地点について、一致度を求め、距離との関係を捉えてみようというわけだ。なお、距離の扱い方は、直線距離や道路距離、鉄道距離などいろいろ考えられるが、ここではもっとも単純な直線距離（正確には大圏距離）で扱う。

『日本語地図』のデータに基づき古の都、京都との一致度と京都からの距離の関係をグラフにしたのが図1である。北海道を除くと、都からの距離に応じて、一致度は下がっていくことがわかる。京都は、平安遷都以降、約1000年にわたって都であり続けた。そのことにより、京都を中心

とした畿内のことば、今でいえば関西弁が、かつては標準語の地位を占めていた。近世に入り、江戸時代中期以降は、実質的な中央が江戸に移行する。さらに明治に入ってから、江戸から名前を変えた東京に都が遷り、標準語も東京のことばを基盤とするものに代わった。それでは、新しい都、東京を元にする、一致度と距離の関係はどのよう

に現れるだろうか。図2は、『日本語地図』に基づき、東京との一致度と東京からの距離の関係を表している。基本的に図1と類似していることがわかる。新しい都であっても、そこからの距離が離れると、それに伴って一致度が下がる（北海道を除く）。中心地としての都からのことばの放射と伝播のようすがグラフによく反映されているようだ。つまり、京都から東京へと都が交代しても、都と地方の言語的

が保たれていることになる。

しかし、である。これは二都が醸し出した、幻想に過ぎない。

■どいつも「坂」の上

図1と図2は、比較する元を京都や東京といった都に設定することにより得られたグラフであった。京都や東京を選ぶことの根底には、「都」だからそこを元にする、というバイアスが最初からかかっていることは明らかである。それでは、任意の地方を比較の元に設定するとどうだろうか。

図3（51頁）は、『日本語地図』のデータを、比較元を山形県に設定したグラフである。

都を元にした図1・図2と同じようす——近くほど一致度が高く、遠くほど一致度が低い——が描き出されている。

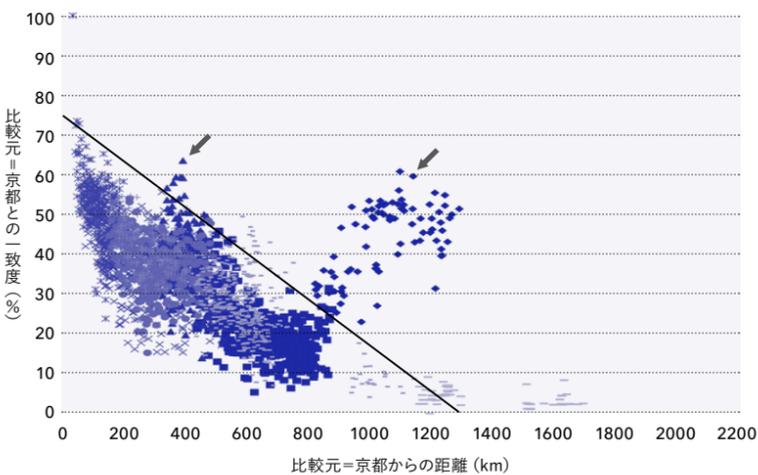
実は、どこを比較元に設定しても、基本的には同じような結果が得られるのである（ただし、特異かつ重要な例外がいくつかあり、そのうちの2点については後述する）。これが意味するところは、ことばは、近いところほど似ていて、遠くなるほど異なる、ということである。つまり、あたりまえといえ、あたりまえの事を表しているに過ぎない。「方言圏論」を想定しがちなのは、「方言」に向き合うに当たり、「都」や「標準語」などに発想が拘束されていることの投影である。

■「崖」のような「坂」もある

方言の一致度を分布として見た場合、全体としてはなだらかな傾斜「坂」を示す。この「坂」は、任意の場所を頂点として、空間的に離れるほど、ことば（方言）も離れることを表している。このことは一般則として確認されることから、どこであっても坂の上にあると見なすことができることになる。

同じ傾斜でも、最初からその坂がある場合と、平らなところからその坂にたどりついた場合とでは、印象がずいぶん異なる。後者の場合、急に現れた坂は、崖のようなイメージを与えるだろう。

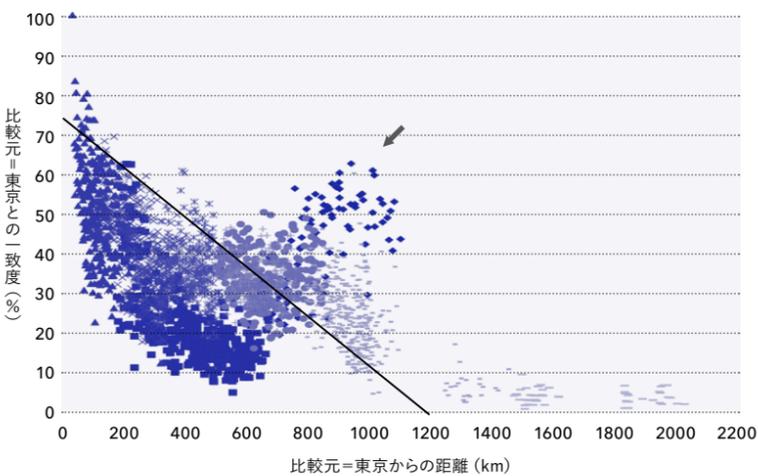
■図1：京都からの距離とことばの一致度



● 右下がりの線で示したのが「坂」であり、遠く離れるほど、ことばの一致度が低下することを示している。矢印で示したのは、二つの「峰」（右が北海道の「峰」、左が東京（関東）の「峰」）。



■図2：東京からの距離とことばの一致度



● 右下がりの線で示した「坂」と矢印で示した北海道の「峰」が確認される。



図1～3は、『日本語地図』に基づく。この地図集はおもに語彙(かまきり、さつまいも、とんぼ等)を対象とする。「坂」らしいようすは、語彙で顕著に現れる。それに対し、文法(時制、否定過去、活用など)を対象とした場合には、一定空間内ではあまり傾斜を見せず、その先でガクンと一致度が下がる「崖」が確認されることがある。『方言文法全国地図』は、その名の通り、文法を対象とした方言地図集である。『日本語地図』と『方言文法全国地図』で傾斜の現れ方が顕著に異なる例を図4に示した。この図では、比較元を和歌山県に設定し、近畿地方内のデータの現れ方を示している。語彙を対象とする『日本語地図』(LAJ)では、全体が「坂」として現れている。それに対し、文法を扱う『方言文法全国地図』(GAJ)では、全体がフラットで、遠方(近畿地方の外縁部)に行くとき最後に「崖」として落ち込むようすが見える。

両者の異なりは、方言が有する言語として、その本質である意思疎通の道具、そしてそれを根幹で支える文法が持つ高いシステム性と無関係ではない。同一の方言圏(この場合、近畿方言)である近畿地方の内部で、文法が傾斜的・連続的に移行することは、言語の共有性に照らすと、望ましいことではない。なるべく均質であることが文法には求められるわけで、そのことがグラフにおけるフラットな形状に現れている。同時に方言圏から離れる場合には、共有性にこだわる必要はない。これらのことが「崖」として顕現している。

■二つの「峰」

図1と図2において、北海道は、遠いのに一致度が高いという、明らかに特異な現れ方を見せて

いる。一致度の高いところが遠くにあり、そのことが「坂」の原則から外れているために、グラフの形状は、比較元から見ると、あたかも、彼方にある「峰」のようだ。

この「峰」を生み出した要因が、移住にあることは明らかである。北海道では、近代以降、本州各地から開拓を目的とする大規模な移住があった。このために、北海道では、移住元のことば(方言)が持ち込まれ、移住先で保持されるときも、異なる移住元の人どうしのコミュニケーション言語として標準語が積極的に活用されることになる。ただし、元方言の保持については、きわめて部分的であり、全体としては標準語に向かい、約2世代でほぼ完了することが知られている。

これらのことが比較元から遠く離れているのに、一致度が高い北海道の顕著な「峰」を発生させたと考えられる。

ところで、図1の400kmあたりを注視してほしい。わずかではあるものの、「坂」の原則から外れた尖りが見られる。北海道ほどは目立たないが、ここにも「峰」がある。この「峰」にあたる場所は、東京を中心とした関東である。京都と東京、つまり東と西はことばが大きく異なるはずなのに、思いがけない類似性がグラフに現れていることになる。

実は、方言分布において、東京は東日本の中で周囲から孤立した、いわば「言語島」のような現れ方を見ることが知られている。たとえば、季節の「梅雨」のことを東日本・関東ではニューバイ(「梅雨入り」ではなく「梅雨」のことである)と言うが、東京では西日本の語形ツユが用いられ、それが現在の標準語にも採用されている。「明後日の翌日」を表すシアサツても同様である。シア

基づく。現在の状態は『新日本語地図』(2010～15年調査)で見ることが出来る。ここでは省略するが、『新日本語地図』を分析すると、「坂」が健在である一方で、東京(関東)の「峰」は見えづらくなっている(北海道の「峰」は今も明瞭である)。かつて、新たな交流が生み出した江戸・東京の「峰」は、約400年にわたる歳月を経て、日々の交流を日常風景とするごくありきたりな状態の「坂」の中に埋没しようとしている。

サツテは、東京で用いられ、また標準語になっているが、もとは西日本の言い方であり、東日本の伝統的な方言としてはヤノアサツテ系の語形が広く分布していた。

このような東京のことばの特性は、江戸という街の形成と無関係ではないと考えられている。都市としての江戸は、近世以降、地方から人々が集まり、徐々に発展した。その際に西日本のことばが導入されることがあった。直接の要因は異なるにしても、近代以降の北海道の形成と通じるところがある。規模や展開速度の違いには留意が必要であるが、共通項として移住があるのは確かである。そして、そのことが北海道と東京(関東)の二つの「峰」を形成したわけである。

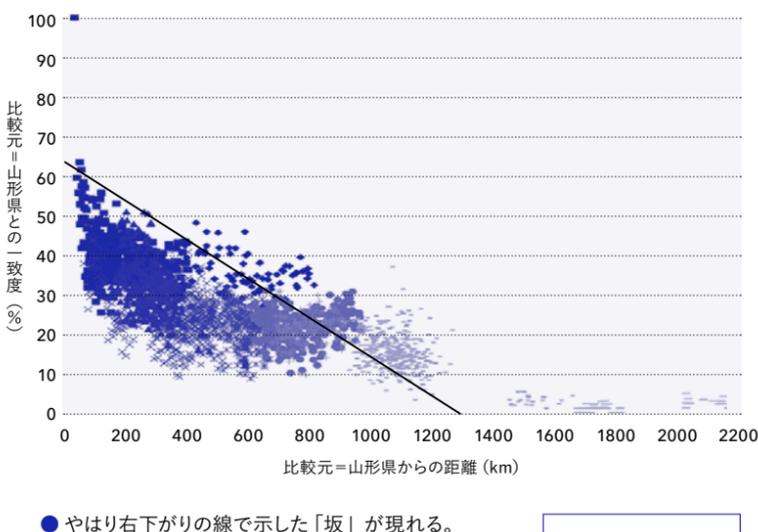
なお、北海道の「峰」の顕著な現れに比べると、東京(関東)のそれはあまり目立たない。ただし、グラフが示すように一致度の数値にはそれほど差があるわけではない。北海道の「峰」を目立たせている「坂」の原則からの大きな外れ方は、北に偏り、かつ面積が広いという空間的特徴に起因する。同じ2500メートルの山でも、2000メートル級の山脈の中にあるか、海の中から直接そびえるか、さらには山容により、見栄えは大きく異なることを思えば、理解しやすいだろう。

■坂・崖・峰と人のつながり

方言という地理空間上のことばの違いにおいて、近くほど似ていて、遠くほど異なるという「坂」の原則が確認される。これは、近くほど密で、遠くほど疎という日々の交わりの永年にわたる積み重ねを背負った方言の自然な状態を表していると思われる。

日常的つながりの中核をなす地域コミュニティ

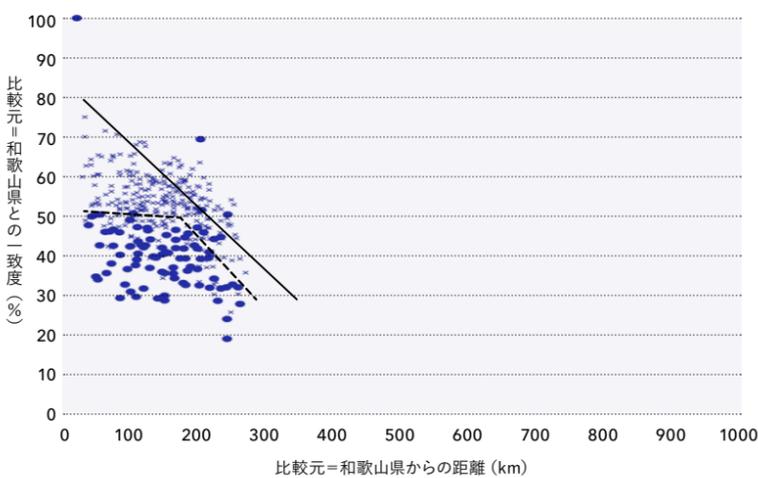
■図3：山形県(東北)からの距離とことばの一致度



●やはり右下がりの線で示した「坂」が現れる。



■図4：語彙の「坂」と文法の「崖」(和歌山県からの距離とことばの一致度)



●距離と一致度を見ると、語彙を扱った『日本語地図』(LAJ)のデータでは実線で示した「坂」が現れるが、文法を扱った『方言文法全国地図』(GAJ)のデータでは点線で示した「崖」のような落ち込みが現れる。



参考文献

『共通語化の過程——北海道における親子三代のことば』(国立国語研究所編、1965年、秀英出版)
『日本語地図』全6巻(国立国語研究所編、1966～74年、大蔵省印刷局)
『方言文法全国地図』全6巻(国立国語研究所編、1989～2006年、大蔵省印刷局・財務省印刷局・国立印刷局)
『新日本語地図』(大西拓一郎編、2016年、朝倉書店)
第5届言語理論と教学研究国際学術研究会「方言区画論と地理語言学」(大西拓一郎、2017年、中国・貴州 興義民族師範学院)
『日本の方言地図』(徳川宗賢編、1979年、中公新書)
Onishi, Takuchiro (2017) "Standard Japanese and standardization of Japanese viewed from geolinguistics" Methods in Dialectology XVII. NINJAL, Tachikawa.